

第16回 皮膚科の臨床 優秀論文賞発表

本誌編集委員会では、昨年（第61巻、2019年）に掲載されたものを対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記論文に第16回「皮膚科の臨床 優秀論文賞」を授与することに決定いたしました。

S-1 とドセタキセルの併用療法が奏効した進行期乳房外 Paget 病の 1 例

馬場 夏希ほか（福井大学医学部医学科感覚運動医学講座、皮膚科学）

78 歳、男性。約 3 年前から外陰部に紅色局面があり、前医で加療を受けていたが改善しないため当院を紹介受診した。病理所見と、画像検査の両鼠径・左外腸骨リンパ節転移から進行期乳房外 Paget 病と診断した。S-1 とドセタキセルの併用による治療を開始し、病変が縮小したため、原発巣の切除と全層植皮術および両鼠径・骨盤内リンパ節郭清術を施行した。術後も同様の化学療法を継続したが、右腸骨動脈領域のリンパ節転移が出現したため、放射線治療を併用し部分寛解を得た。進行期乳房外 Paget 病において、副作用の少ない S-1 とドセタキセルの併用は術前術後を問わず高齢者でも使用しやすい化学療法と考えられた。

（第 61 巻 第 10 号、1499-1503 頁、2019 年）

選考評

乳房外 Paget 病は、早期に診断加療されると比較的予後良好と思われるが、進行期になると治療に難渋する疾患である。馬場夏希先生らは、高齢の男性に生じた進行期乳房外（外陰部）Paget 病に対する治療奏効例を報告された。本症例は、前医で皮膚潰瘍として外用加療されており、紹介時すでに鼠径リンパ節と外腸骨リンパ節に転移があった。治療に難渋する症例であるが、化学療法（S-1 とドセタキセル）により病変が縮小したため、原発巣の切除とリンパ節郭清術を行い、さらに放射線治療を併用して部分寛解を得た。工夫した集学的治療が奏効した症例といえる。初診時、化学療法施行後、手術後のきれいな臨床写真が提示され、各治療の意義についても分かりやすく考察されている。進行期の皮膚悪性腫瘍という難治症例に対して、患者の状態や希望も加味して最善の治療をなし得たものと思われる、優秀論文賞に相応しいと考えた。

受賞のことは

今回は優秀論文賞という素晴らしい賞に選出していただき、誠にありがとうございます。

選考に携わった先生方、ならびに今回の執筆の際に指導していただいた先生方には心から御礼を申し上げます。

乳房外 Paget 病は外陰部に好発し、その部位的特徴から発見や確定診断が遅れることもあり、本症例のように進行してから皮膚科を受診される症例も少なくはないかと思います。本症例は S-1 とドセタキセルの併用療法を基盤とし、手術・放射線治療を行いました。患者さんの QOL や PS を下げることなく腫瘍をコントロールできております。進行期乳房外 Paget 病の抗がん剤の選択についてはまだ確立はしていませんが、今回の報告が治療方針のご参考のひとつになればという思いもあり、この論文を書かせていただきました。

また本症例は私にとって乳房外 Paget 病の、そして鼠径リンパ節郭清の手術に初めて入らせていただいた症例でもあります。当時の初心を忘れずに今後も日々精進を重ねてまいりたいと思います。この度は誠にありがとうございました。



- 受賞論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。
- 本誌編集委員会では今後も優秀論文賞の選考を行ってまいります。投稿規定を熟読のうえ、奮ってご投稿下さい。